40周年企画　部会活動

統計調査部のあゆみ

増田　　徹

執筆の対象となる3年間の統計調査部長を見てみると、平成23年度が林伴子氏（社神病）、24年度が佐藤道子氏（県光風）、25年度が畑美之氏（阪警察）と、毎年異なっている。さらに前回この文章を書かれたのが武田昭子氏（刈谷総）で、現在書いているのが私増田であることから、統計調査部長は最近の5年間代わり続けていることになる。部活動の内容が、その集計作業が非常に煩雑で緻密さを求められるとはいえ、比較的業務内容が固定されていることから、統計調査部という部活動は、当協議会の人手の少なさの割を食っているといえる。

この3年の間に統計調査は、簡易調査が2回、詳細調査が1回行われた。その1度の詳細調査は、基本情報と統計部分を分けるなど大きな変更があった。もちろん、インターネットの発達を受けて、統計調査のオンラインへの移行と、名簿との一元化など、協議会内の構想の中、変化を受けやすい状況ではあるが、会員に無用な負担をかけていないか心配している。人が代わると、そのたびに担当者として変えたい部分が出てきて、調査用紙や質問項目、報告書に変化が出る。いろいろな変化に機敏に対応するのは大切なことだが、統計調査は時間の経過の中で安定して行われるよう、長いスパンで見守ることのできる姿勢も求められる。部活動としてしっかりとした体制が得られるよう、会員のみなさまのご協力をお願いしたい。

この3年間の回答施設数および回答率は表1の通りである。

表1　統計調査回答数の推移

年度	回答施設	回答率
平成23年度	88/123施設	71.5％
平成24年度	102/118施設	86.4％
平成25年度	97/117施設	82.9％

平成24年度の回答率は非常に高くなっている。しかも平成24年度は詳細調査である。これはその年の担当者が熱意を持って未提出機関に回答の提出を促したと聞いている。一方、平成23年度の調査においては、督促作業を行わなかったと総会の報告で述べられている。統計調査においては、督促作業と回答率に相関関係があると思われる。督促すれば提出する層というのがある程度存在しているということだが、できるだけ担当者の手をわずらわせることのないようお願いしたい。

統計調査は、病院図書館のあり様を世の中に示す社会的に意義のあることであり、それを提出しないですませるのは、病院図書館の一員であるという自覚に欠けると言わざるを得ない。さらに業務上自分自身が行うさまざまな判断において、自館の数値が持つ意味に無自覚な姿勢は、専門職としての図書館員に背を向ける行為といえる。

ますだ　てつ：藍野大学　中央図書館